

『蕪村自筆句帳』復元の試み

―春部欠落箇所への復元―

清登 典子

はじめに

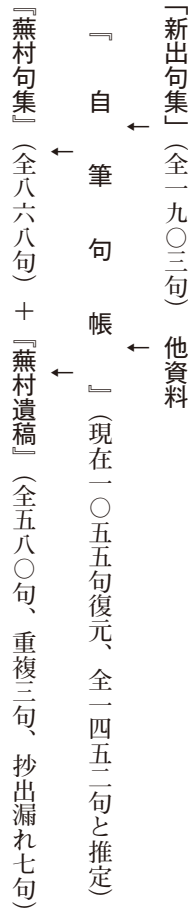
平成二十七年（二〇一五）年十月十五日の新聞発表⁽¹⁾によって原本の出現が報告された新出の蕪村句集『夜半亭蕪村句集』（以下、『新出句集』と称する）については、これまで様々な角度から検討を加え、『新出句集』が蕪村晩年の自選句集稿本である『蕪村自筆句帳』（以下、『自筆句帳』と称する）の主要な選句資料の一つである可能性の極めて高いものであることを指摘した。⁽²⁾

『自筆句帳』は蕪村自身が天明二（一七八二）年頃に起筆し、翌三年春の出版を目指して自選したとされる四季別自選句集であるが、出版されることなく蕪村が病没したために自筆稿本のまま残り、蕪村の娘の婚礼資金とするために弟子達によって分割、頒布され、各地に散逸してしまったものである。昭和四十九年にそのうちの一点である酒田市本間美術館蔵の「蕪村自筆句稿貼交屏風」を中心として尾形仿氏によって九七九句が復元され、『蕪村自筆句帳』と名付けられて出版された。⁽³⁾現時点での最新の研究成果を示すのは、講談社版『蕪村全集』第三巻収載の『蕪村自筆句帳』であり、そこには以後に発見された句稿断簡類を含め、全部で一〇五五句が復元されている。⁽⁴⁾

ただし、句稿断簡類の未発見のために復元されていない発句が四百句近くあると考えられており、その欠落箇所は「〇」印で示されている。

この欠落箇所について、これまでは新たな句稿断簡類の出現によらない限り明らかすることはできないと考えられてきた。しかし、今回の「新出句集」の出現により、欠落箇所の発句配列を推定できる可能性が出てきたと言える。というのも、すでに指摘されているように、『自筆句帳』から八六八句を選んで類題別に再編集された句集が

『蕪村句集』（凡葦編、天明四年刊）であり、『自筆句帳』から『蕪村句集』未収録句を順番に抜き出して成った句集が『蕪村遺稿』という関係にあるので、『蕪村句集』または『蕪村遺稿』に収載されている句であれば、『自筆句帳』に収載されていた句と見做すことが可能であり、「新出句集」における両句集への収載句の配列（とくに類題別に再編集されたことにより『自筆句帳』における配列順推定が不可能となっている『句集』の配列）を知ること
で、『自筆句帳』欠落箇所における発句配列が推定できる可能性が出てきたと考えられるからである。いま、「新出句集」「自筆句帳」「蕪村句集」「蕪村遺稿」の関係を収載句数の情報とともに示してみると次のようになる。



本稿では、「新出句集」の出現によつて『自筆句帳』の欠落箇所復元の可能性が出てきたとの見通しに立ち、春部欠落箇所に対応する「新出句集」の発句配列に検討を加えることで、欠落箇所復元の可能性を追求していくことにする。

一 欠落箇所Aの復元

さて、講談社版全集所収の『自筆句帳』には、全部で二四の欠落箇所が「○」印により示されているが、そのうち春部の欠落箇所とされているのは、以下に挙げるAからEの五箇所である。句番号はすべて講談社版全集の『自筆句帳』の収載順番号である。いま他句集における番号と区別するため、収載順番号の前に「自」の文字を付けて示す。

欠落箇所 A 自 15 番句と自 16 番句の間

欠落箇所 B 自 53 番句と自 54 番句の間

欠落箇所 C 自 221 番句と自 222 番句の間

欠落箇所 D 自 229 番句と自 230 番句の間

欠落箇所 E 自 237 番句と自 238 番句の間

以下、順番にそれぞれの欠落箇所を取り上げ、復元の可能性を探っていく。

まず、欠落箇所 A は『自筆句帳』15 番句と 16 番句の間にあるとされる欠落箇所である。実は『自筆句帳』の 1 番句から始まる巻頭部分は、「新出句集」との対応関係がもつとも錯綜している部分に当たっている。いま、欠落箇所 A を含め『自筆句帳』1 番句から 16 番句までの発句を、「新出句集」春部における収載順番号と『蕪村句集』（以下、『句集』と略称）または『蕪村遺稿』（以下、『遺稿』と略称）における収載順番号とともに示せば次のようになる（収載順番号の前に「新」「句」「遺」の語を付すことで、それぞれ、「新出句集」、「蕪村句集」、「蕪村遺稿」の収載順であることを示す。また、前書は省き発句のみ挙げる。以下、同じ。）

自 1 ほうらいの山まつりせむ老の春

新 287 句 1

自 2 春の海終日のたり／＼かな

新 58 句 117

自 3	物種の袋ぬらしつ春の雨	新 57	句 68
自 4	藪入の夢や小豆のにへる中	新 68	句 38
自 5	うぐひすのあちこちとするや小家がち	新 49	句 4
自 6	春をしむ人や榎にかくれけり	新 7	遺 1
自 7	わらび野やいざもの焚む枯つゝじ	新 14	句 144
自 8	洗足の鹽もゝりてゆく春や	新 25	句 216
自 9	けふのみの春を歩ひて仕舞けり	新 28	句 217
自 10	歩きく物おもふ春のゆくへかな	新 29	遺 2
自 11	葉ざくらや碁氣に成行奈良の京	新 31	遺 3
自 12	春雨や身に古頭巾着たりけり	新 32	句 69
自 13	初午やその家くの袖だゝみ	新 35	句 82
自 14	山鳥の尾をふむ春の入日哉	新 38	句 114

自15 春雨や人住みてけぶり壁を洩る

新44 句67

○欠落箇所A

自16 木の下が蹄のかぜや散さくら

新143 句163

右に挙げた『自筆句帳』収載句と「新出句集」収載句の収載順を見比べればわかるように、『自筆句帳』の巻頭部分、とくに1番句から5番句までの配列は「新出句集」の配列との間に一貫した対応関係を見ることができない。

なかでも巻頭句(自1番句)は、安永四年の春帖に「安永乙未歳旦」と前書して入集している歳旦句であり、基本的に作句年次順に発句が配列されている「新出句集」においては、287番目という春部全四六八句中の後半以降に位置する句である。おそらく、晩年の蕪村自身が自選句集を編むに際して、巻頭を飾るにふさわしい句として、比較的近年に詠んだ歳旦句の中から自信作を選んだのではないかと推測される。また、自2番句から自5番句までも新出句集の配列順とはやや異なる配列が示されているが、いずれも「春の海終日のたりくかな」「物種の袋ぬらしつ春の雨」「藪入の夢や小豆のにへる中」「うぐひすのあちこちとするや小家がち」など蕪村の代表的春句と思われる句が並んでおり、いずれも自選句集の巻頭に並べるのにふさわしい句として選ばれたものかと推測される。それに対して自6番句から自15番句については、「新出句集」春7番句から44番句の間から配列順に沿って並んでいることが確認でき、「新出句集」から『自筆句帳』へ配列順に採録された可能性が高いと推測される。

また、『遺稿』収載句が遺1から遺3まで番号順に含まれていることは、これらの句を含む『自筆句帳』1番句から15番句までが書かれている句稿断簡が『自筆句帳』巻頭部として復元されたことの妥当性を示すものと思われる。

こうした点を踏まえ、『自筆句帳』15番句と16番句の間に存在する「欠落箇所A」の復元について検討していく。『自筆句帳』15番句16番句はそれぞれ「新出句集」44番句と143番句とに対応しているので、もし『自筆句帳』

への句の採録が「新出句集」の配列に基づいて一貫して行われていた場合には、「新出句集」の45番句から142番句の間の九八句中に見える『句集』または『遺稿』収載句の配列がそのまま「欠落箇所A」に対応すると推定できる。いま、「新出句集」45番句から142番句の間に配列されている『句集』または『遺稿』に収載されている全三六句を番号順に示せば、左の通りである。

新47	春の雨穴一の穴に溜まり晁	遺156
新48	春雨や小磯の小貝ぬれに晁	句70
新49	鶯のあちこちとするや小家がち	句4 自5
新55	出替や春さめくと古葛籠	句154
新57	物種の袋濡しつ春の雨	句68 自3
新58	春の海終日のたりとかな	句117 自2
新63	そこくに見過しぬ田螺壳	句87
新68	藪入の夢やあづきのにへる中	句38 自4
新69	高麗船のよらで過行霞かな	句60

新70 昨日いに今日いに雁のなき夜かな

句 93

新71 行春や歌も聞へす宇佐の宮

遺 4

新74 古庭に茶筌花咲椿かな

句 79

新76 今歳より蚤初めぬ小百性

遺 5

新77 菜の花や遠山鳥の尾上まで

遺 6

新80 是切に径尽たり芹の中

句 44

新82 炉ふさぎや床は維摩に掛替る

句 213

新85 雛店の灯を引頃や雨の音

句 155

新88 春雨や綱が袂に小てうちん

句 78

新94 野辺の梅白くも赤くもあらぬ哉

遺 7

新96 花の幕兼好を覗く女あり

句 195

新97 行春や撰者を恨む歌の主

句 215

新 118	新 115	新 111	新 110	新 108	新 107	新 105	新 104	新 103	新 101	新 99
衣手は露の光や紙ひいな	苗代の色紙に遊ぶ蛙かな	一輪を五ッにわけて梅ぞ散	野と共にやける地藏のしきみ哉	春の夜に尊き御所を守身かな	ひぢ白き僧の仮寝や宵の春	難波女や京を寒がる御忌詣	風吹ぬ夜るもの凄き柳哉	富士嵐十三州のやなぎ哉	鶯の声遠き日も暮に梟	鶯の枝踏はずす初音かな
遺 148	句 132	遺 158	句 145	句 48	句 47	句 36	遺 147	遺 9	句 5	遺 8

新 119 法然の珠数もかゝるや松の藤 遺 10

新 123 うつむけに春うちあけて藤の花 句 208

新 127 鶯の鹿相がましき初音かな 句 6

新 132 白梅の枯木に戻る月夜かな 句 33

右に示した配列から「新出句集」と『自筆句帳』との対応関係が錯綜している様子を具体的に捉えることができる。

まず、「新出句集」45番句から142番句の間に、『自筆句帳』5番句(新49番句)、3番句(新57番句)、2番句(新58番句)、4番句(新68番句)が含まれている。これらの句は『自筆句帳』巻頭に収載される句としてすでに句稿断簡により復元されている句であるから、欠落箇所Aに含まれる句として扱うことはできない。

次に、『遺稿』収載句を見ると、欠落箇所Aに含まれているはずの『遺稿』4番から10番の句が「新出句集」71番から119番までの間に番号順に存在していることが確認できる。しかし、その一方で、遺156番(新47)、遺147番(新104)、遺158番(新111)、遺148番(新118)という欠落箇所Aに含まれないと考えられる『遺稿』収載句が四句も含まれている。これは、後述するように、『自筆句帳』春部の最終部分に当たる230番句から237番句まで(とくに236番句まで)が、「新出句集」の春部巻頭部分に対応していることと関係しているためと考えられ、これら四句は欠落箇所Eに対応する句と捉えられる。すなわち右の一覧に示した三六句には、「欠落箇所A」に含まれる句と「欠落箇所E」に含まれる句とが混在しており、収載順が『自筆句帳』とは異なる『句集』収載句の場合、どの句を「欠落箇所A」あるいは「欠落箇所E」の句と認めるかの判断は非常に難しい。

したがって現時点で「欠落箇所A」に含まれることが確実なのは、先に挙げた『遺稿』4番句から10番句に対応する「新出句集」71番(遺4)、76番(遺5)、77番(遺6)、94番(遺7)、99番(遺8)、103番(遺9)、119番

(遺10)の七句のみとなる。『句集』収載句の配列を含む「欠落箇所A」全体の配列の復元は、現時点では困難であり、今後さらに検討を進めることで可能性を探っていくこととしたい。

二 欠落箇所Bの復元

欠落箇所Bは、『自筆句帳』53番句と54番句との間に位置する欠落箇所である。この箇所の前後に当たる『自筆句帳』16番句から53番句まで、および54番句から174番句までは、「新出句集」の収載順との間に緊密な対応関係を見ることができ(ただし例外として24番句と25番句との間に237番句が存在する。この点については欠落箇所Eの検討において取り上げる。)、**「新出句集」**から『自筆句帳』収載句が採録されたことが確実と推定される。したがって欠落箇所復元の可能性が高いものと期待される。

いま『自筆句帳』53番句、54番句の発句を欠落箇所Bの箇所を含めて、先に見た欠落箇所Aの場合と同様に、新出句集春部における収載順番号と『蕪村句集』または『蕪村遺稿』における収載順番号とともに示せば次のようになる。

自53 細き身を子に寄添る燕哉

新232 遺27

○欠落箇所B

自54 塊に答うつうめのあるじかな

新267 遺35

『自筆句帳』53番句は「新出句集」では春部232番句に対応し、『自筆句帳』54番句は新出句集春部267番句に対応する。したがって「新出句集」の233番句から266番句に当たる三四句のうち、『句集』または『遺稿』に収載されている句を並べれば、それが『自筆句帳』の「欠落箇所B」に対応すると推定できる。いま、この基準に該当する発句

を「新出句集」の収載順に示せば左のようになる。

新 233 雛祭る都はづれや桃月 句 156

新 235 苦舟をかいつくろひぬ春雨 遺 28

新 239 日くれく春やむかしの心哉 遺 29

新 243 春の暮我住京に帰らめや 遺 30

新 244 商人を吼る犬有桃の花 句 158

新 245 さくらより桃にしたしき小家哉 句 159

新 246 つゝじのやあらぬ所に麦畠 句 146

新 247 二もとの梅に遅速を愛す哉 句 19

新 250 行春やおもたき琵琶の抱ごゝろ 遺 31

新 254 菜の花や昼一しきり海の音 遺 32

新 255 日は日くれよ夜は夜あけよと啼蛙 句 133

新 260	門前の嫗が柳糸かけぬ	遺 33
新 263	陽炎や潜みあへずも土竈 (ママ)	遺 34
新 264	梅折て皺手にかこつ薫り哉	句 20
新 265	紅梅や比丘より劣る比丘尼寺	句 107
新 266	鶯や比叡をうしろに高音哉	句 9

該当する句は全部で十六句であり、これは『自筆句帳』が「毎半葉平均八行の割でしたためられ」ていたとする「解説」^⑥に照らすと句稿断簡一葉分に相当する分量となる。

また、欠落箇所Bに含まれるはずの『遺稿』28番句から34番句までが番号順に収載されており、それ以外の『遺稿』収載句や『自筆句帳』収載句が含まれていないことは、右に示した「新出句集」の配列を欠落箇所Bの配列と推定することの妥当性を証するものと言える。

最後に「新出句集」と「句集」「遺稿」収載句との句形の違いについて確認しておく。比較した結果、次の三句に表記の違い以外の句形の異同が見られた。「新出句集」239番句の下五「心哉」が『遺稿』29番句では「おもひ哉」となっており、新出句集243番句の上五「春の暮」下五「帰らめや」が『遺稿』30番句ではそれぞれ「花に暮ぬ」「帰去来」となっており、「新出句集」266番句の上五「鶯や」が「句集」9番句では「鶯の」となっている。いずれも『遺稿』収載句の方が推敲された句形と判断できるので、「新出句集」から『自筆句帳』への収載時または収載後に推敲されたものと考えられる。

三 欠落箇所C、欠落箇所Dの復元

欠落箇所Cと欠落箇所Dについては一括して取り上げることとする。

まず欠落箇所Cは『自筆句帳』221番句と222番句の間に存在し、欠落箇所Dは自229番句と自230番句の間に存在すると推定されるのだが、「新出句集」収載句には、『自筆句帳』1番句から174番句までと230番句から237番句までに対応する句が含まれているが、175番句から229番句までに対応する句は含まれておらず、これら五五句は「新出句集」以外の資料から『自筆句帳』に採録されたと考えられる。そのため、欠落箇所CおよびDについては、ともに「新出句集」の配列から欠落箇所の発句配列を推定することができない。今後「新出句集」以外の蕪村発句資料類についても調査、検討を加えることで、欠落箇所C、Dの復元を目指していきたいと思う。

四 欠落箇所Eの復元

欠落箇所Eは『自筆句帳』237番句と238番句との間に位置する欠落箇所である。実は238番句は夏部冒頭句であるので、欠落箇所Eは237番句以降に配列されていたはずの春句欠落部分と捉えられる。以下に『自筆句帳』230番句から238番句までを「新出句集」春部および夏部発句（この場合、「新夏」の語を収載番号前に付す）、および『句集』または『遺稿』における収載順番号とともに示してみる。

自 230	几巾きのふの空の有所	新 2	句 161
自 231	永き日を云ハでくるゝや壬生念仏	新 6	遺 144
自 232	花ちりてこの間の寺と成にけり	新 8	句 202

自 233	立雁のあしもとよりぞ春の水	新 9	遺 145
自 234	初午やものだね売に日の当る	新 11	句 84
自 235	しのゝめに小雨ふり出すやけ野かな	新 12	句 140
自 236	兀山や何にかくれてきじの声	新 15	句 103
自 237	苗代や鞍馬のさくら散にけり	新 175	句 203

○欠落箇所 E

〔夏〕

自 238	きぬきせぬ家中ゆゝしき衣更	新夏 2	句 225
-------	---------------	------	-------

まず気付かされるのは、欠落箇所 A の検討に際しても指摘したように、『自筆句帳』230 番句から 236 番句までが「新出句集」春部冒頭の 2 番句から 15 番句と対応していることである。『自筆句帳』と「新出句集」との関係だけを見れば、これらの句を記した句稿断簡は、『自筆句帳』の冒頭部に当たると可能性が考えられるところであるが、『自筆句帳』復元の指標とされる『遺稿』収載句の配列順を確認すると、『遺稿』144 番句、145 番句が含まれており、『自筆句帳』春部終末部分に配置されるべきものであることが明白である。

しかし、『自筆句帳』230 番句から 236 番句の間には、『自筆句帳』6 番句（「新出句集」7 番句）、同 7 番句（「新出句集」14 番句）が含まれており、対応関係が錯綜している様子が窺える。このことから推測されるのは、『自筆句

帳』への句の採録に際して、「新出句集」から『自筆句帳』6番句から174番句までがまず採録され、その後他資料から175番句以下229番句までが採録された後、再び「新出句集」からの採録に戻り、冒頭部から230番句以下236番句までが採録されたのではないか、ということである（なお『自筆句帳』237番句は「新出句集」175番句と対応する句であり、236番句に対応する「新出句集」15番句からは大きく離れて配列されており、「新出句集」の配列とは無関係に採録された可能性が高いかと考えられるが、その理由等については不明である。さらに検討を重ねたい）。

また、『自筆句帳』復元の際の指標とされる『遺稿』収載句の収載順について確認すると、欠落箇所Eには『遺稿』146番句から159番句までの十四句が含まれているはずと考えられるが、そのうち五句が「新出句集」に収載されていることが確認できた。まず、『遺稿』147番句、148番句、156番句、158番句の四句は、先に欠落箇所Aの検討の折に取り上げた「新出句集」45番句から142番句までの間に存在する『句集』または『遺稿』収載句全三六句の中に含まれている。さらに『遺稿』159番句は、「新出句集」の夏部350番句として収載されている。この句は春の季語「梨の花」を詠んだ句だが、誤って夏部に収録されており、句頭に「春」と注記されている。とすれば、『自筆句帳』春部句の採録に際して、最後の段階で「新出句集」夏部に誤って収録されていた春句を採録したのではないかと推測される。実は「新出句集」夏部の351番も「梨の花」の句であり、350番句と同様に句頭に「春」と注されている（春句でありながら「新出句集」他季の部に収載されている句はこの二句のみである）。注目すべきことは、この夏部351番句が『句集』の205番句として収載されていることである。とすれば現時点までに復元された『自筆句帳』には収載されていないが、『自筆句帳』に採録されていたことは確実な句であり、その場合夏部350番句とともに欠落箇所Eに含まれていた可能性が高いと推定される。

ここまで判明した「新出句集」収載句で欠落箇所Eに含まれている可能性が高いと考えられる『遺稿』および『句集』収載句を番号順に示してみる。（「新出句集」収載順は春部、夏部それぞれの収載順を示すため、春部は「新春」、夏部は「新夏」として収載順番号を示した。なお本来欠落箇所Eに含まれるはずの『遺稿』146番句および149～155番句の計八句については「新出句集」に収載されていないため取り上げなかった。）

遺147 風吹ぬ夜はもの凄き柳かな

新春104

遺 148 衣手は露の光りや紙雛 新春 118

遺 156 春の雨穴一の穴にたまりけり 新春 47

遺 157 くれかぬる日や山鳥のおとしざし 新春 37

遺 158 一輪を五ツにわけて梅ちりぬ 新春 111

遺 159 長き日にましろに咲ぬなしの花 新夏 350

句 205 梨の花月に書ミよむ女あり 新夏 351

以上、欠落箇所Eを「新出句集」との対応関係から復元しようと試みた結果は、欠落箇所Eに含まれると推定される句として『遺稿』収載句の六句と『句集』収載句の一句との合わせて七句を示すに留まることとなった。

七句について「新出句集」収載句と句形を比較すると、表記の違い以外の句形の異同が次の四句で見られた。

・「新出句集」春 104 中七「夜るもの凄き」

・「新出句集」春 111 下五「梅ぞ散」

・「新出句集」夏 350 上五中七「長い日に白く咲たり」

・「新出句集」夏 351 下五「女かな」

いずれの句形の異同も、『遺稿』あるいは『句集』収載句の句形の方が表現が整っていると思われる。おそらく「新出句集」から『自筆句帳』への採録時または採録後の推敲の結果と見ていいだろう。

なお、十四句あるはずの欠落箇所Eに含まれる『遺稿』収載句のうち六句のみしか「新出句集」に収載されていないことからすると、『自筆句帳』欠落箇所Eに該当する部分においても、「新出句集」以外の他資料からの句の

採録、あるいは他資料と「新出句集」とが見比べられた上での採録がなされていたかと推測される。欠落箇所Eの復元については、他資料についての詳細な調査を含め、今後さらに検討を進めることで少しでも復元の可能性を探っていきたい。

まとめ

ここまでの検討結果をまとめてみる。今回、春部欠落箇所五箇所の復元の可能性を探った結果、欠落箇所Bに相当する句稿断簡一葉分の発句配列を推定することができた。

また、今回の調査、検討を通じて「新出句集」から『自筆句帳』春部への発句採録の仕方について、次のような推測が成り立つのではないかと見えてきた。

- 1、『自筆句帳』春部冒頭部分に当たる1番句から5番句までは、自選句集の巻頭を飾る句という意識から「新出句集」の配列とは無関係に蕪村自身の評価にしたがって選ばれたかと考えられる。
- 2、『自筆句帳』6番句から174番句までは「新出句集」の配列に沿って選句されたと推定される。
- 3、『自筆句帳』175番句から229番句までは「新出句集」には収載されておらず、「新出句集」とは異なる他の資料から選句されたと推測される。
- 4、他の資料からの選句が終わった後、再び『自筆句帳』230番句以降の句が「新出句集」（主として冒頭部）および他資料から採録され、最後に「新出句集」夏部に誤って収録されていた春句を採録したものと推測される。

今回の『自筆句帳』春部欠落箇所5箇所の復元の試みは、「新出句集」以外の他資料から『自筆句帳』春部への選句がまとまってなされた部分のあることや、「新出句集」からの採録が冒頭部分などで繰り返されたことによる両句集の対応関係の錯綜などもあり難しい面が多かったと言える。しかし、わずか一葉分であっても、欠落箇所の発句配列を推定できたことは大きな成果であると考ええる。今後も引き続き『自筆句帳』夏部、秋部、冬部の欠落箇所につ

いて調査、検討を進めて行きたい。

注

- (1) 同日付の「読売新聞」には、「蕪村未知の212句発見」と題して、天理大学付属天理図書館が、新たに出現した蕪村句集『夜半亭蕪村句集』を入手したこと、そこにこれまでに知られていない未知の蕪村発句212句が含まれていることを前日十四日に発表したとの記事が掲載されている。「朝日新聞」「毎日新聞」など他の主要新聞各紙にも同日付で同様の記事が掲載されている。
- (2) 拙稿「新出資料から見る蕪村俳諧の世界」『ビブリア』146号、二〇一六年十月、および拙稿「夜半亭蕪村句集の位置付け—全収載句および「新出句」の検討結果を受けて—」『連歌俳諧研究』134号、二〇一八年三月。
- (3) 尾形仿「解説」『蕪村自筆句帳』筑摩書房、一九七四年。
- (4) 『蕪村全集』第三卷「句集・句稿・句会稿」講談社、一九九二年
- (5) 注(3)に挙げた尾形仿「解説」において、『遺稿』には『句集』との重複句が三句、抄出漏れ句が七句があることが指摘されている。
- (6) 注(3)に同じ。

〔付記〕本研究は、科学研究費助成事業（基盤研究（C）課題番号：18K00311）による成果の一部である。